

ビハーラで最期を迎えるということの価値はどこにあるとひとびとは考えているか？

—仏教者の役割意識と病棟スタッフの捉え方に焦点をあてて—

医療法人崇徳会 長岡西病院ビハーラ病棟

的場和子 多賀裕美 多田洋子 森田敬史

①研究報告要旨（A4判横書1枚：400字程度）

本研究は、臨死期にある人およびその家族への一つのケアモデルである、緩和ケアその中でも特に仏教を基盤にしたビハーラ活動に関するこれまでの臨床実践の評価を試みるものである。

その第一段階として、サービス提供者側が自らをどのように<みて>いるのか、ということに取り組んだ。なかでも特にビハーラの特性を形作っている仏教者に焦点をあて、ボランティアとして、病棟設立時よりかかわりのある仏教者ビハーラの会のメンバーのうち病棟での活動に積極的にかかわるものの聞き取り調査を行った。それに呼応して、病棟スタッフにも病棟における仏教者の役割について聞き取りを行った。今回の調査結果からは、仏教者自身、および病棟スタッフはビハーラにおける仏教者の役割を何か目的をもち明確な役割を果たす行為者としてではなくむしろ、その構成要素として場に即していかようにも変容しうる受動的な有り様と考えられた。そういった<有り様>の価値が昨今の対人サービスの評価のフレームワークでどのように評価しうるのか、利用者・家族の視点から見た仏教者の役割について、更なる調査を重ね、考察を重ねてゆく必要がある。

481字

②研究報告書（A4 判横書 4、000 字以内）

## 1. 研究の目的・方法

長岡西病院ビハーラ病棟は、三つの理念に基づく、仏教を基盤にした看取りの場である。1992 年の開設以来、常勤の仏教僧侶 1 名と 1987 年に発足した地元僧侶のボランティア組織である“仏教者ビハーラの会”の有志が病棟での臨床実践にかかわってきた。

わが国では現在、次世代に適合した社会制度設計の再考が行われている。その主な論点として資源配分の問題が問われており、サービスの費用対効果が問われている。緩和ケア病棟もケアの質の評価という枠組みを逃れられない時代である。

われわれは、＜緩和ケア病棟＞としてのみではなくビハーラ理念に基づく臨床活動を行ってきた。したがって一般的な緩和ケアの評価のみでは不十分であり、ビハーラ理念がどのように現実化されているのかということも含めた評価が求められる。今回、ビハーラで看取るといふことの意味に関する研究プロジェクトを立ち上げ、外部の研究者とともに一連の調査研究に着手した。

本研究はその一環として、第一に仏教者の関わりを実際に確認し検討し、第二に調査諸活動を通して＜価値＞を探るといふことそのものについての意味を再考することを目的とした。

まず、第一段階として、積極的にビハーラと関わってきた仏教僧侶が、ビハーラの有り様、その場での自らの役割、またビハーラに関わるようになった動機についてどのように捉えているのかを探り、次にそれらを受けて、その仏教僧侶が関わっている場にある医療者が、仏教僧侶の役割や期待していることについてどのように考えているのかを探ることを目的とした聞き取り調査を行った。

## 2. 内容・実施経過

2008 年 4 月に、あらかじめ研究内容の趣旨を説明し、調査協力の同意が得られた僧侶を 3、4 名のフォーカスグループとして、聞き取りを行った（調査 1）。対象者はビハーラ病棟にボランティアとして活動した経験がある僧侶 11 名であり、プライバシーが保たれる一室において実施した。ファシリテーターは研究代表者の的場が担当した。データ収集には、IC レコーダーを用い、それより逐語録を作成し、Atlas.ti を用いてデータ解析し、共同研究者間で検討した。

2008 年 5 月～6 月に、それらをさらに深めていくために、その導きだされたトピックを中心として、外部機関の調査研究者 2 名による半構造化面接を実施した（調査 2）。対象者は上記の対象者のうち、法務などを考慮し、時間的調整が可能であった 7 名であり、データ収集については上記と同様の手段を用いた。

それらを受けて、2008 年 5 月～6 月に、平成 20 年 4 月 1 日現在ビハーラ病棟に勤務している常勤ケアスタッフ 20 名（看護師 16 名・介護福祉士 3 名・看護助手 1 名）のうち、日常業務を考慮し、時間的調整が可能であった 8 名を対象に適時インタビューを実施した（調査 3）。調査内容は、「仏教僧侶の役割についてどう捉えているのか」、「仏

教僧侶に何を期待しているのか」といったことを中心に、仏教僧侶を対象とした調査に対応すると思われる項目であり、同様の方法で逐語録を作成した後、内容分析を行った。

一連の調査における倫理的配慮として、研究の趣旨や内容を説明し同意が得られた上で面接を実施し、確認がとれた上で録音した。

調査1の対象者の年齢は、30歳代4名・40歳代4名・50歳代0名・60歳代2名・70歳代1名、総計11名の仏教僧侶であった（すべて男性）。所属宗派は、浄土真宗本願寺派3名・真宗大谷派2名・曹洞宗3名・真言宗豊山派3名で、“仏教者ビハーラの会”会員歴については、20年以上2名・15年以上20年未満2名・10年以上15年未満3名・5年以上10年未満2名・5年未満2名となっていた。

対象者の逐語録より、“葬式仏教”と揶揄される現代において、仏教僧侶として、何ができるのか、あるいは何をすべきなのか、という意識が働いており、現在の法務に対して、あるいは自らの僧侶としての立場に対して、これでいいのだろうかという不安を打開するために、ビハーラ活動という実践に結びつけようとする傾向が窺えた。現在まで、10年以上も継続して関わっている仏教僧侶であっても、最初はとまどいや居心地の悪さを感じていたという結果が示された。それでも、その場にただいることがビハーラの一つの大事な点であると、何か役割を与えられるというわけではなく、“風景”として、自らの存在価値を見出している仏教僧侶がいることが明らかとなった。また、仏教者として、悟りを求めるだけではなく、広く人々に何かを伝えていく（あるいは感じてもらう）ことが大切になってくると考え、ビハーラでの実践に参加している仏教僧侶がいることが明らかとなった。さらに、世代間の相違として、開設当初から関わっている仏教僧侶は仏教的側面を前面的に出す傾向がみられたが、ここ数年で関わるようになった仏教僧侶は（仏教者としての雰囲気醸し出しながらも）人と人のつながりを重要視するような関わりをもつ傾向が多数みられた。多くの仏教僧侶が、継続した（病棟スタッフや患者・家族を含めた利用者との）関わり必要性を指摘する一方で、法務などの理由で、制限された時間内ではなかなか難しい現状に対して葛藤を抱いていることが浮き彫りとなった。

病棟スタッフの仏教僧侶の捉え方としては、やはり緩和ケア病棟という施設の性質上、利用者が抱く“死”というものの存在が表出されることがあるため、死後の世界観など宗教的要素が色濃くでるような事項に対して、その専門家という位置づけで肯定的意見がみられた。それとともに、病棟で日常的に執り行われる勤行に利用者が熱心に参加している姿から、宗教的行動に対して肯定的見方がなされていた。一方で、仏教的雰囲気から亡くなるために来る場所であると思っている利用者の存在を挙げ、慎重的意見も聞かれた。特に世代間の差異として、病棟勤務が短いスタッフの方が仏教僧侶というよりその人個人をみる傾向があり、その中に「そう言えばお坊さんだったんだ」というのが自然な感じとして認知しているスタッフの存在も明らかとなった。

概ね仏教僧侶の存在意義に関しては、医療従事者ではない視点に立てるという意味な

どで、重要視する傾向が窺われた。利用者の関わりの中で、時間的にも内容的にも深くまで接することができることから、他職種との連携について、うまく融合しているのではないかと指摘する意見も聞かれた。すなわち、利用者や病棟スタッフとの関係性に対する仏教僧侶の思いが浮き彫りになったが、病棟スタッフサイドとしては、現時点での連携スタイルについて、概ね良好な見方を示している事が明らかとなった。ただ、「病院ボランティアとしての研修を受け、直接的なケアにも参加すべきではないか」といった仏教者からの少数意見に関して、スタッフ側のニーズとしては、通常提供されているケア以外の部分での期待が大きいようであった。

### 3. 成果

今回の調査より結果として次の2点が導き出された。

#### 1) 仏教僧侶の受動的な役割意識

今回の聞き取り調査では、仏教僧侶にとってのビハーラにおける自らの役割意識は必ずしも明確なものではなく、自らの仏教僧侶としてのアイデンティティに対する様々な思いを抱えていることが浮き彫りになった。これはすなわち、単に仏教僧侶自身が仏教に基づいて緩和ケアを行えばいいという平板な構図ではなく、自らの役割に対する様々な葛藤があり、実践を通して仏教への見方を絶えず更新していることが窺われた。

#### 2) スタッフの<場の一部>としての宗教者の認識

仏教僧侶が何か<主体的>な役割を<能動的>に果たす（そのためには役割規定は明確化される）というよりも、“場の雰囲気（ここでは“風景”と表現されているが）”を作り出すために仏教僧侶（あるいは仏教）が大切な要素であるということ、すなわち主体的というよりは、場として受動的（その場で<主体的>に行動するエージェントに応じていかようにも役割が変容しうる存在として認識されているのではないかということが示唆された。

以上を受けて、今後の課題として現時点では次の2点が挙げられる。

#### 1) 利用者調査の施行

今回の調査ではまず、ビハーラでサービスを提供している側にフォーカスを当てて調査を行った。ビハーラの価値、それにかかわる、仏教者の役割の内容に関しては、もちろん、それを提供する側にある人々の認識も重要であるが、なにより探求されなくてはならないのは、それを実際に受けて臨死期をすごしてゆく利用者の捉え方である。今回も緩和ケアの利用者はその特性から、実際の方法については注意深く検討する必要がある。

#### 2) <ある>ことの評価はいかにして可能か

今回の調査結果からビハーラでの宗教者は行為主体者という役割を必ずしも果たしていない／期待されていないという可能性が浮かびあがった。現行の<対人サービス>評価のしくみでは、<質の担保>の概念は、1) 目指しているものは何か、2) それを達成するためにどのようなしくみが構築されているか、3) そのしくみがきちんと機能し

ているか、と説明される。つまり、このフレームワークでは目的（意図）をもった行為主体が一定の方法（しくみ）で対象に介入した場合、その対象にもたらされる好ましい変容が成果として認識される。主体性をもたずに、そこにただくある>だけの意味はこのフレームワークでは捉えきれない。調査の第二段階として利用者調査に取り組みつつ、フィールドからのフィードバックを反映させつつ課題2にも取り組んでゆく予定である。

3917 字